

Topic

ゴルビー人形あれこれ

佐々木 雅 幸

この9月、私はペレストロイカとグラスノスチの進行するソビエト連邦を訪問する機会を得た。わずか2週間で、モスクワ、レニングラード、ハバロフスク、ノボシビルスク、イルクーツク、そしてウラジオストクの6都市を、それぞれ広大なロシアの大地の東端から西端へと駆け足で見て廻った。学術的な感想は別の機会に述べることにし、ここでは私的な旅の思い出を記すことにしよう。

新潟空港を発つ前から、私は今回の旅行の土産のメインは「ある人形」に決めていた。ふつう、ソ連土産の人形といえば、マトリョーシカと呼ばれる民族衣裳をまとったかわいらしい少女のこけし人形——体が上下に分かれて中から次々とミニサイズの人形が現われ、多い場合には20体にも及ぶ——と相場が決まっていたが、最近では、ロシアの少女にかわって、連邦政府の大統領——ミスター・ゴルバチョフを模した新種の人形が人気を集めているという「うわさ」が流れていた。そこで私は、他のことはさておいても、この「ゴルビー人形」とやらを土産にしたいと心秘かに決意していたのである。

前日深夜ホテルに到着した私は翌朝早速モスクワの「竹下通り」と呼ばれる「アルバート街」に向かった。アルバート街はモスクワの上級官僚が住む高級マンション街であるが、現在は若者達が集まる最もナウイまちに変わっており、ペレストロイカの進展とともに怪しげな商売も始まっている。

日本の露店風のマトリョーシカ売りの若者が喫茶店の前にたむろしているが、置いてあるのは普通の何の変哲もない少女の人形である。意を決して、そのうちの一人に「ゴルビードール？」と聞いてみると、彼は足もとにおいてあるトランクを持ち出してそっと中を見せながら、「300ルーブル」と答えた。「高



い」とつぶねて歩き始めると、「じゃあ、25ドルではどうか。ここではポリ公が見ているのでまずい。向こうの建物の陰で渡すから、ドルを用意してくれ」と私の耳もとで囁いた。「取引成立」。冷や汗をかきながら、手に入れた私のゴルビー人形はしかし、値切ったせいか、ゴルバチョフ、ブレジネフ、フルシチョフ、スターリンまでの四体まで。肝腎のレーニンが入っていない。(ゴルビーは「レーニンの精神に戻れ」といってペレストロイカを始めたはずなのに) 私は内心「連中にしてやられた」と思った。

翌々日レニングラードのオストロフスキー広場を訪れるとモスクワでは規制が厳しかったために、店頭におかれていなかったゴルビー人形が、白昼公然と並べて売られている。(写真参照) しかも、ここではゴルビーからレーニンまでではなく、ペーター大帝まで全部で7体のものまでである。そういえば、つい最近も「レニングラード」という都市名を革命前の「ペテルスブルク」に戻そうという市民の集会が開かれているのだ。ここでは、ペレストロイカを越えてレーニンどころか、「ロシア社会の西欧化」を推進したペーター大帝の精神まで戻れということをも民衆が求めているのかも知れないと思いつつ、私はもう一つのゴルビー人形を買うことにしたのである。

(金沢大学経済学部助教授)